

# 1 住み手・つくり手との協同作業で つくり上げる個人住宅

住む人の笑顔にじかに触れるよろこび



**下小鳥の家** 畳スペースから居間を見る。L型の大開口で光と風を取り込む。



**経堂の家** アトリエをイメージした建て主のスケッチを建築として具現化した。



**川口の家** 吹き抜けのある大空間を実現するトラス構造は、デザインと機能の融合。

## コミュニケーションを大切に

私は個人事務所の主宰で、依頼の多くは個人住宅の設計です。知人の紹介や、雑誌やHPを見た方からの問合せで、一般の建て主から相談を受けて設計を行います。住み手の要望をよく聞き、生活スタイルや敷地その他諸々の条件を入念に検討し、専門家の立場から十分に掘り下げたものを提案します。

着工すると現場に何度も足を運び、設計の意図が施工に反映されているかを確認したり、建て主や現場とのさまざまな調整を行う総合プロデューサーの役目を果たします。建て主や現場でのやり取りから新たなアイデアが生まれることもしばしば。住まいづくりは、住み手とつくり手と私たち設計者との協同作業であり、コミュニケーションが何よりも大切だと考えています。

## 住み手との共鳴がすぐれた住宅を生む

建て主と直接的に深く関わる個人住宅の仕事では、建て主のアイデアと設計側の提案とが相乗効果を生み、想像以上の素晴らしい家が出来ることがあります。

例えば、絵本作家のご主人とイラストレーターの奥様のお宅・経堂の家では、クリエイターのお二人のアイデアをスケッチにして

いただき、それを私が建築として具現化。コラボレーションによりベストのものが出来たと大変喜んでいただき、私は協同による感動の成果を味わいました。

川口を建て主は、町工場で金属研磨をしている技術者の方でした。ドアに真鍮を使いたい、下地に使うような建材で外壁を構成したいと、とにかく材料に関する知識の深い方でした。この時は現場からもアイデアが出てきました。施工会社、職人、建て主、設計者が一緒に考えるコラボレーションの状態になると、現場が面白くなります。まさにものづくりの醍醐味を感じる瞬間でした。

## 建築とデザインに魅せられて

この道を志したのは大学のとき。大学で建築を知り、建築の魅力にとりつかれました。建築の造形そのものにも魅力を感じますし、建築が思想や要求、要件、機能、材料、美しさ、環境といった「素材」を整理し、より理想的に統合させて形になるところ、すなわち「素材」を“デザイン”するところにも魅力を感じています。

最初の就職先は、公共施設などの大規模な建築物を扱う大手設計事務所でした。早く自分の設計を手がけたいという思いで、なんでも積極的に取り組み、プロジェクトマネー

## 桐山和広さん

一級建築士、インテリアプランナー  
桐山和広建築設計事務所 代表



### 《経歴》

1968年生まれ。明治大学工学部建築学科卒業。組織設計事務所に入社し、11年間、公共施設を中心に様々な建築設計に従事する。2004年に独立し、桐山和広建築設計事務所を設立。住宅を中心とした設計業務の他、明治大学理工学部建築学科兼任講師も務め、建築家として活躍中。

### 《実績》

- ・経堂の家
- ・阿佐ヶ谷の家
- ・川口の家
- ・習志野の家
- ・下小鳥の家
- ほか多数

### 《受賞歴》

- ・彩の国人にやさしいまちづくり賞(1998)
- ・茨城県建築文化賞(2003)
- ・ダイキンエアスタイルコンテスト特別賞(2009)
- ・住まいのインテリアコーディネーション製造産業局長賞(2010)
- ・インテリアプランニングアワード入選(2010)

ほか多数

ジャーとして数件の実績をつくった後、33歳で独立しました。

インテリアプランナーの資格を取得したのは、独立前のスキルを増やそうとしていた時期になります。

## デザインの本质をつかむ

この仕事をするうえで重要なのは、「本质をつかむ」ことだと考えています。建築に敬意を払い、誠実に、嘘がないものをつくること。プロジェクトをこなすための仕事ではなく、何のために誰のためにつくるのか、その本質を見失わなければ、どんなことでもできると思います。まずは優れた建築を見て建築を好きになることから始めては、自分なりに建築の魅力を追いかける姿勢が、スキルアップや専門家としての成長につながると思います。